

横田英史の 書籍紹介コーナー



AI 2041

～人工知能が変える20年後の未来～

カイクー・リー、チェン・チウファン、
中原尚哉・訳
文藝春秋 2,970円(税込)

AIや量子コンピュータ、VR/AR/MRが2041年の社会・生活をどのように変えるかを描いた書。SF小説とその背景となる技術解説をワンセットにして一つの章を構成する。SF小説の部分は、ノンフィクションではカバーできない部分も描写しており、「なるほどね」と納得感がある。エンターテインメントとして楽しむのがお勧めである。

本書がカバーするのは、自動運転、仮想通貨、AI医療、AI学習、自然言語処理、ディープフェイク、AI兵器、パンデミックが定期的に起こる社会など。AIが仕事を奪い、ベーシックインカムが導入された社会における人間の行動や心理を描いた章は考えさせられる。

深層学習を使った保険プログラムの話も興味深い。保険プログラムは多くのアプリと連携しており、一見すると健康・安全につながる生活へと人間をどんどん導く。しかし、それが悲劇につながる。

システム・エラー社会 ～「最適化」至上主義の罠～

ロブ・ライヒ、メラン・サハミ、
ジェレミー・M・ワINSTAイン、小坂恵理・訳
NHK出版 2,970円(税込)

GAAFをはじめとするビッグテック企業が社会に絶大な影響を及ぼす状況や過度の技術重視に危機感をいだき、より

よい社会づくりに向けた政策や社会制度、教育の方向性を示した書。アルゴリズム、プライバシー、インターネットにおける言論の自由、スマートマシンに関する問題を取り上げる。テクノロジーの未来をエンジニアやベンチャーキャピタリスト、政治家に任せてはならないと説く。

米スタンフォード大学が進めるコンピュータ・サイエンス学部での倫理教育プログラムがベースになっている。社会倫理教育センターの哲学者、エンジニア出身のコンピュータ・サイエンス学部教授、オバマ政権のスタッフ出身の政治学教授が筆者である。エンジニアやIT企業の基本原則である最適化が、プライバシーや自由・平等を脅かし、民主主義の健全性を損なう可能性がある」と強調する。

発明の経済学

～イノベーションへの知識創造～

長岡貞男
日本評論社 6,160円(税込)

発明やイノベーションが生まれる要件、発明やイノベーションの価値を高める要件を多様なデータに基づき定量的に分析した書。

米国と日本の比較は興味深い。例えば米国では予想されない研究開発の副産物(セレンディピティ)が10%強と日本の3.4%に比べ3倍も多い。セレンディピティの生まれる確率は、特定事業と直結しておらず、基礎研究を研究範囲に含んでいると高くなる。また米国は日本より、特許文献よりも科学文献を重視する傾向が強い。技術の進歩性の持続には、特許発

明の集積よりもサイエンスの進展が重要という。

個別発明ごとに相当の対価を支払うことを義務化する「オリンパス判決」に対する分析は興味深い。この判決でリスクの小さな研究開発プロジェクトを追求する傾向が強まった。発明の質やサイエンス活用の低下を招いたという。

話題にしてもらおう技術

～90.5%の会社が知らないPRのコツ～

加藤恭子
技術評論社 1,980円(税込)

優れた企業や製品、サービスがユーザーに知られることなく姿を消す事例が後を絶たない。こうした勿体ないケースを減らすテクニックを紹介した書。BtoB企業の広報・マーケティングやIT関連メディアの記者を経て、PR会社を設立した筆者が、長年の経験で得た「話題にってもらおう技術」を具体的に披露する。評者のような記者出身者から見ても的を射た指摘が多く、自社の製品やサービスの効果的なアピールに悩んでおられる方にお勧めである。

取材される側(企業)と取材される側(記者)の意識には大きなギャップがある。企業が当然だと思っていることが、記者から見ると非常識に映る。注目を集める情報の8つの法則、話題になるためのPR5つ道具、疲弊しないで話題になり続けるための考え方と仕組みづくりなど、筆者は具体的な事例を示しながら、この不幸なギャップの解消を図る。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。
川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロスストック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役就任。2018年3月退任。
2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、現在に至る。
記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

